第27回

福岡アジア文化賞
FUKUOKA PRIZE 2016

大　賞

A.R.ラフマーン

作曲家・作詞家・歌手／インド

学術研究賞

アンベス・R・オカンポ

歴史学者／フィリピン

芸術・文化賞

ヤスミーン・ラリ

建築家・人道支援活動家／パキスタン

報告書

主催　福岡市、公益財団法人福岡よかトピア国際交流財団
後援　外務省、文化庁

Asian Party

アジアンパーティは、「アジアと創る」をコンセプトに、アジアの人、モノ、情報が集う社交場をイメージしています。

今年は、主要事業である「アジアフォーカス・福岡国際映画祭」「福岡アジア文化賞」、「The Creators」の三つを柱に、民間企業・団体等と連携した様々なイベントを開催し、全18事業で約57万人に参加いただきました。

アジアンパーティPRポスター

アジアフォーカス・福岡国際映画祭　2016.9.15 Thu - 25 Sun

The Creators　2016.10.8 Sat - 9 Sun

発行／福岡アジア文化賞委員会事務局
〒810-8620 福岡市中央区天神1−8−1　福岡市総務企画局国際部内
TEL 092-711-4930　FAX 092-735-4130
Email:acprize@gol.com　http://fukuoka-prize.org/

福岡アジア文化賞の受賞者

= 創設特別賞　= 大賞　= 学術研究賞　= 芸術・文化賞

パキスタン
- 第7回 ヌスラット・ファテ・アリー・ハーン（カッワーリー歌手）
- 第17回 アクシ・ムフティ（民俗文化保存専門家）
- 第27回 ヤスミーン・ラリ（建築家・人道支援活動家）

第27回芸術・文化賞受賞者
ヤスミーン・ラリ

ネパール
- 第15回 ラーム・ダヤル・ラケーシュ（民俗文化研究者）

インド
- 第2回 ラヴィ・シャンカール（音楽家・シタール奏者）
- 第5回 パドマー・スブラマニヤム（舞踊家）
- 第8回 ロミラ・ターパル（歴史学者）
- 第15回 アムジャッド・アリ・カーン（サロード奏者）
- 第18回 アシシュ・ナンディ（社会・文明評論家）
- 第20回 パルタ・チャタジー（政治学・歴史学者）
- 第23回 ヴァンダナ・シヴァ（環境哲学者）
- 第24回 ナリニ・マラニ（アーティスト）
- 第26回 ラーマチャンドラ・グハ（歴史学・社会学者）
- 第27回 A.R.ラフマーン（作曲家・作詞家・歌手）

第27回大賞受賞者
A.R.ラフマーン

アジア以外の国・地域

イギリス
- 第1回 ジョゼフ・ニーダム（中国科学史研究者）

アイルランド
- 第11回 ベネディクト・アンダーソン（政治学者）

オーストラリア
- 第5回 王 賡 武（歴史学者）
- 第13回 アンソニー・リード（歴史学者）
- 第24回 テッサ・モーリス＝スズキ（アジア地域研究者）

フランス
- 第20回 オギュスタン・ベルク（文化地理学者）

ドイツ
- 第22回 ニールズ・グッチョウ（建築史家・修復建築家）

アメリカ
- 第2回 ドナルド・キーン（日本文学・文化研究者）
- 第3回 クリフォード・ギアツ（文化人類学者）
- 第6回 ナム・ジュン・パイク（ビデオアーティスト）
- 第9回 スタンレー・J・タンバイア（人類学者）
- 第21回 ジェームズ・C・スコット（政治学者・人類学者）
- 第25回 エズラ・F・ヴォーゲル（社会学者）

モンゴル
- 第4回 ナムジリン・ノロゥバンザト（声楽家）
- 第17回 シャグダリン・ビラ（歴史学者）

中国
- 第1回 巴 金（作家）
- 第4回 費 孝 通（社会学・人類学者）
- 第7回 王 仲 殊（考古学者）
- 第13回 張 芸 謀（映画監督）
- 第14回 徐 冰（アーティスト）
- 第15回 厲 以 寧（経済学者）
- 第17回 莫 言（作家）
- 第20回 蔡 國 強（現代美術家）

ブータン
- 第16回 タシ・ノルブ（伝統音楽家）

ミャンマー
- 第11回 タン・トゥン（歴史学者）
- 第16回 トー・カウン（図書館学者）
- 第26回 タン・ミン・ウー（歴史学者）

スリランカ
- 第13回 キングスレー・M・デ・シルワ（歴史学者）
- 第15回 ローランド・シルワ（文化遺産保存建築家）
- 第19回 サヴィトリ・グナセーカラ（法学者）

バングラデシュ
- 第12回 ムハマド・ユヌス（経済学者）
- 第19回 フォリダ・パルビーン（音楽家）

タイ
- 第1回 ククリット・プラモート（作家・政治家）
- 第5回 スパトラディット・ディッサクン（考古学・美術史学者）
- 第10回 ニティ・イヨウシーウォン（歴史学者）
- 第12回 タワン・ダッチャニー（画家）
- 第18回 シーサック・ワンリポードム（人類学・考古学者）
- 第23回 チャーンウィット・カセートシリ（歴史学者）
- 第24回 アピチャッポン・ウィーラセタクン（映画作家・アーティスト）

インドネシア
- 第2回 タウフィック・アブドゥラ（歴史学者・社会科学者）
- 第6回 クンチャラニングラット（文化人類学者）
- 第9回 R.M.スダルソノ（舞踊家・舞踊研究者）
- 第11回 プラムディヤ・アナンタ・トゥール（作家）
- 第23回 クス・ムルティア・パク・ブウォノ（宮廷舞踊家）
- 第25回 アジュマルディ・アズラ（歴史学者）

★福岡

香港
- 第19回 アン・ホイ（映画監督）
- 第25回 ダニー・ユン（文化クリエイター）

台湾
- 第10回 侯 孝 賢（映画監督）
- 第18回 朱 銘（彫刻家）

ラオス
- 第16回 ドアンドゥアン・ブンニャウォン（織物研究家）

ベトナム
- 第7回 ファン・フイ・レ（歴史学者）
- 第26回 ミン・ハン（ファッションデザイナー）

カンボジア
- 第8回 チェン・ポン（劇作家・芸術家）
- 第22回 アン・チュリアン（民族学者・クメール研究者）

フィリピン
- 第3回 レアンドロ・V・ロクシン（建築家）
- 第12回 マリルー・ディアス＝アバヤ（映画監督）
- 第14回 レイナルド・C・イレート（歴史学者）
- 第23回 キドラット・タヒミック（映画作家）
- 第27回 アンベス・R・オカンポ（歴史学者）

第27回学術研究賞受賞者
アンベス・R・オカンポ

マレーシア
- 第4回 ウンク・A・アジズ（経済学者）
- 第11回 ハムザ・アワン・アマット（影絵人形遣い）
- 第13回 ラット（マンガ家）
- 第19回 シャムスル・アムリ・バハルディーン（社会人類学者）

シンガポール
- 第10回 タン・ダウ（ビジュアルアーティスト）
- 第14回 ディック・リー（シンガーソングライター）
- 第21回 オン・ケンセン（舞台芸術家）

日本
- 第1回 黒澤 明（映画監督）
- 第1回 矢野 暢（社会科学者）
- 第2回 中根 千枝（社会人類学者）
- 第3回 竹内 實（中国研究者）
- 第4回 川喜田 二郎（民族地理学者）
- 第5回 石井 米雄（東南アジア研究者）
- 第6回 辛島 昇（歴史学者）
- 第7回 衞藤 瀋吉（国際関係研究者）
- 第8回 樋口 隆康（考古学者）
- 第9回 上田 正昭（歴史学者）
- 第10回 大林 太良（民族学者）
- 第12回 速水 佑次郎（経済学者）
- 第14回 外間 守善（沖縄学者）
- 第17回 濱下 武志（歴史学者）
- 第20回 三木 稔（作曲家）
- 第21回 毛里 和子（現代中国研究者）
- 第24回 中村 哲（医師）

韓国
- 第3回 金 元 龍（考古学者）
- 第6回 韓 基 彦（教育学者）
- 第8回 林 権 澤（映画監督）
- 第9回 李 基 文（言語学者）
- 第16回 任 東 権（民俗学者）
- 第18回 金 徳 洙（伝統芸能家）
- 第21回 黄 秉 冀（音楽家）
- 第22回 趙 東 一（文学者）

CONTENTS

福岡アジア文化賞の受賞者 …… 1・2
福岡アジア文化賞とは …… 3・4
第27回受賞者
- 大賞　A.R.ラフマーン …… 5
- 学術研究賞　アンベス・R・オカンポ …… 6
- 芸術・文化賞　ヤスミーン・ラリ …… 7

授賞式 …… 8～12
市民交流事業
- A.R.ラフマーン …… 13
- アンベス・R・オカンポ …… 14
- ヤスミーン・ラリ …… 15

国際交流基金アジアセンターとの共催企画 …… 16
記者会見および広報活動など …… 17
歴代受賞者名鑑 …… 18～22

福岡アジア文化賞とは

福岡アジア文化賞の趣旨

アジアは、多様な民族、言語、文化が共に生き、交流する世界です。その多様な文化は、長い歴史と伝統を守り抜くだけでなく、新しいものをも生み出してきました。

今、グローバリゼーション時代の到来により、文化面にも画一化の波が押し寄せ、アジア固有の文化が失われていく恐れがあります。このような時代にこそ、独自の文化を守り、育て、共生を進める必要があります。

福岡は、古くから日本の窓口として、アジア諸地域との交流において重要な役割を担ってきました。このような福岡の特性を踏まえて、アジア地域の優れた文化の振興と相互理解および平和に貢献するため、1990年に市、学界、民間が一体となって福岡アジア文化賞を創設しました。以来、多くの素晴らしい受賞者に賞を贈り、その広がりはアジアのほぼ全域にわたっています。

未来へつながる文化交流とは、長い歴史と伝統をもつ固有の文化を保存、継承するのみならず、変化の中から生まれようとする新しいものにも目を向け、尊重し、そこから学びながら新たに創造していくことであり、福岡市は、市民と共にアジアの文化交流都市を目指しています。

この賞を通じて、私たちは市民と共に、アジアの学術・芸術・文化に貢献した人々に敬意を表し、アジアの固有で多様な文化の価値を、これからも都市の視点で広く世界に伝えていきたいと考えています。

1. 目的

アジアの固有かつ多様な文化の保存と創造に顕著な業績を挙げた個人又は団体を顕彰することにより、アジアの文化の価値を認識し、その文化を守り育てるとともに、アジアの人々が相互に学び合いながら、幅広く交流する基盤をつくることに貢献することを目的とします。

2. 賞の内容

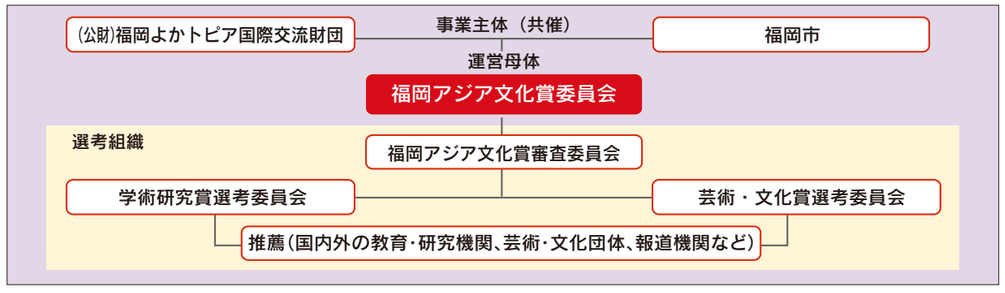
大　賞	学術研究賞	芸術・文化賞
賞金　¥5,000,000	賞金　¥3,000,000	賞金　¥3,000,000
アジアの固有かつ多様な文化の保存と創造に貢献し、その国際性、普遍性、大衆性、独創性などにより、世界に対してアジアの文化の意義を示した個人または団体を対象としています。	人文科学・社会科学などの、アジアを対象とした学術研究における優れた成果により、アジアの理解に貢献するとともに、今後さらに活躍が期待される個人または団体を対象としています。	アジアの固有かつ多様な芸術・文化の育成又は発展に貢献するとともに、今後さらに活躍が期待される個人または団体を対象としています。

3. 対象圏域

東アジア、東南アジアおよび南アジア地域

4. 主催

福岡市、公益財団法人福岡よかトピア国際交流財団※



※福岡よかトピア国際交流財団：アジア太平洋博覧会―福岡’89の成功を記念するとともに、アジアに開かれた福岡の歴史、文化、その他の特性を生かした国際交流を促進する活動を行うことにより、市民一人ひとりが多様性を認め合いながら国際的な相互理解を深める多文化共生社会の実現に寄与し、地域の発展と国際平和に貢献することを目的としています。

第27回福岡アジア文化賞のあゆみ

2015.07　48か国・地域約7,000人に第27回受賞候補者の推薦を依頼
2016.02　学術研究賞（1日）、芸術・文化賞（6日）各選考委員会にて、推薦された27か国・地域の受賞候補者166名について選考
2016.03　審査委員会（2日）にて審査
2016.04　審査・選考合同委員会（28日）
2016.05　文化賞委員会（30日）にて3人の受賞者を承認
2016.09　記者会見（15日）、授賞式（16日）、学校訪問（15日、16日）、市民フォーラム（17日、18日）
　　国際交流基金アジアセンターとの共催による受賞者東京講演会（20日）

福岡アジア文化賞委員会委員

2016年10月現在

特別顧問	宮田亮平	文化庁長官
〃	下川眞樹太	外務省国際文化交流審議官
〃	小川洋	福岡県知事
名誉会長	髙島宗一郎	福岡市長
会長	礒山誠二	（公財）福岡よかトピア国際交流財団理事長
副会長	久保千春	九州大学総長
〃	おばた久弥	福岡市議会議長
〃	貞刈厚仁	福岡市副市長
監事	谷川浩道	福岡市社会福祉協議会会長
〃	水町博之	福岡市会計管理者
委員	荒牧智之	九州電力株式会社代表取締役副社長
〃	飯盛利康	福岡市議会第1委員会委員長
〃	石田正明	福岡市議会副議長
〃	岩松城	毎日新聞社取締役西部本社代表福岡本部長
〃	唐池恒二	九州旅客鉄道株式会社代表取締役会長
〃	川崎隆生	西日本新聞社取締役会長
〃	久保田勇夫	株式会社西日本シティ銀行取締役会長
〃	佐々木良	九州運輸局長
委員	佐藤靖典	福岡市レクリエーション協会副会長
〃	柴戸隆成	株式会社福岡銀行取締役頭取
〃	城本勝	日本放送協会福岡放送局長
〃	髙橋直人	九州経済産業局長
〃	竹島和幸	西日本鉄道株式会社代表取締役会長
〃	多田昭重	福岡文化連盟会長
〃	田中優次	西部ガス株式会社代表取締役会長
〃	田村やよひ	日本赤十字九州国際看護大学学長
〃	中井一平	読売新聞西部本社代表取締役社長
〃	橋本仁	朝日新聞社執行役員西部本社代表
〃	服部誠太郎	福岡県副知事
〃	平岡啓	日本経済新聞社常務執行役員西部支社代表
〃	藤永憲一	株式会社九電工代表取締役会長
〃	星子明夫	福岡市教育委員会教育長
〃	山口政俊	福岡大学学長
〃	山本盤男	九州産業大学学長
〃	K.J.シャフナー	西南学院大学学長

（委員名は50音順、敬称略）

第27回福岡アジア文化賞 審査・選考委員

福岡アジア文化賞審査委員会

委員長　**久保　千春**　九州大学総長

副委員長　**貞刈　厚仁**　福岡市副市長

委員　**石坂　健治**　日本映画大学教授　東京国際映画祭　プログラミング・ディレクター

委員　**清水　展**　京都大学東南アジア研究所教授

委員　**竹中　千春**　立教大学法学部教授

委員　**柄　博子**　国際交流基金 理事

委員　**土屋　直知**　株式会社正興電機製作所　代表取締役会長

委員　**藤原　惠洋**　九州大学大学院　芸術工学研究院教授

福岡アジア文化賞選考委員会 学術研究賞

委員長　**清水　展**　京都大学東南アジア研究所教授

副委員長　**竹中　千春**　立教大学法学部教授

委員　**天児　慧**　早稲田大学大学院　アジア太平洋研究科教授

委員　**木宮　正史**　東京大学大学院　総合文化研究科教授

委員　**河野　俊行**　九州大学大学院　法学研究院教授

委員　**清水　一史**　九州大学大学院　経済学研究院教授

委員　**新田　栄治**　鹿児島大学名誉教授

委員　**脇村　孝平**　大阪市立大学大学院　経済学研究科教授

福岡アジア文化賞選考委員会 芸術・文化賞

委員長　**藤原　惠洋**　九州大学大学院　芸術工学研究院教授

副委員長　**石坂　健治**　日本映画大学教授　東京国際映画祭　プログラミング・ディレクター

委員　**後小路　雅弘**　九州大学大学院　人文科学研究院教授

委員　**内野　儀**　東京大学大学院　総合文化研究科教授

委員　**宇戸　清治**　東京外国語大学名誉教授

委員　**川村　湊**　法政大学国際文化学部教授

委員　**小西　正捷**　立教大学名誉教授

委員　**寺内　直子**　神戸大学大学院　国際文化学研究科教授

2016年10月現在　50音順、敬称略

第27回 大賞 受賞者

A.R.ラフマーン *A. R. RAHMAN*

インド ／ 音楽（1967年生まれ）

主な経歴

1967	インド、タミル・ナードゥ州チェンナイ生まれ
1978	キーボード奏者として様々な楽団で演奏
1987 - 92	広告およびインドのテレビ用に300以上のコマーシャルソングを作曲
1992	マニ・ラトナム監督のタミル映画『ロージャー』の音楽を作曲
1995	『ボンベイ』(1995)のために作曲した、ボンベイ・テーマが世界で50以上のアルバムに使用される
2000 - 08	音楽ディレクターとして、マニ・ラトナム、シャード・アリ、アシュトーシュ・ゴーワリケール、シャンカルなどといった監督の50本を超える映画音楽を担当
2002	アンドリュー・ロイド＝ウェバー(『オペラ座の怪人』作曲)に招かれてロンドンで上演するミュージカル『ボンベイドリームス』の作曲を担当
2005	米国タイム誌、オールタイム世界ベスト・サウンド・トラックのトップ10に『ロージャー』が選ばれる
2006	自身のレコードレーベル「KM Music」を設立
2007	英国ガーディアン紙「死ぬまでに聴きたいアルバム1000」に『ボンベイ』のサントラが選ばれる
2008	インド、チェンナイで音楽学校「KM Music Conservatory」を設立し学長を務める
2009	米国タイム誌「世界で最も影響力のある100人」に選ばれる
2010	AR Rahman基金を設立 ノーベル平和賞コンサート出演
2011	『127時間』でアカデミー賞、ゴールデン・グローブ賞、英国アカデミー賞にノミネート ミック・ジャガー、ジョス・ストーン、ダミアン・マーリー、ディヴ・スチュワートからなる「スーパーヘヴィ」に参加

主な受賞歴 ＊複数年の受賞歴あり (この他国内外で多数の受賞歴あり)

1992	タミル・ナードゥ州映画賞最優秀音楽監督賞(『ロージャー』)＊ ナショナル・フィルムアワード最優秀音楽監督賞(『ロージャー』)＊
1993	フィルムフェア賞南インド部門最優秀音楽監督賞(『ロージャー』)＊
1994	サンスクリット賞(サンスクリット財団より)
1996	モーリシャス賞、マレーシア賞
2000	インド国勲章パドマ・シュリー章 国際インド映画アカデミー賞最優秀音楽監督賞(Taal) ＊
2008	米国、放送映画批評家協会賞作曲賞(Critics' Choice Award) (『スラムドッグ$ミリオネア』) ＊
2009	第81回米国アカデミー賞 作曲賞、歌曲賞(『スラムドッグ$ミリオネア』) 英国アカデミー賞 最優秀映画音楽賞 (『スラムドッグ$ミリオネア』) ゴールデン・グローブ賞 作曲賞 (『スラムドッグ$ミリオネア』) グラミー賞 映画・テレビ・映像メディアサウンドトラック・アルバム賞(『スラムドッグ$ミリオネア』)、楽曲賞 (*Jai Ho*)
2010	インド国勲章パドマ・ブーシャン章
2011	米国、放送映画批評家協会賞(Critics' Choice Awards)歌曲賞 (『127時間』)

主な映画作品(作曲担当)

『ロージャー』(1992) *Roja*
『ボンベイ』(1995) *Bombay*
『ムトゥ 踊るマハラジャ』(1995) *Muthu*
『ジーンズ～世界は二人のために～』(1998) *Jeans*
『ディル・セ 心から』(1998) Dil Se..
『パダヤッパ いつでも俺はマジだぜ!』(1999) *Padayappa*
『ラガーン』(2001) *Lagaan*
『バーバー』(2002) *Baba*
『ヘブン・アンド・アース 天地英雄』(2003) *Warriors of Heaven and Earth*
『インサイド・マン』(2006) *Inside Man*
『エリザベス：ゴールデン・エイジ』(2007) *Elizabeth: The Golden Age*
『スラムドッグ$ミリオネア』(2008) *Slumdog Millionaire*
『127 時間』(2010) *127 Hours*
『ボス その男シヴァージ』(2012) *Sivaji*
『命あるかぎり』(2013) *Jab Tak Hai Jaan*
『マダム・マロリーと魔法のスパイス』(2014) *The Hundred - Foot Journey*
『ミリオンダラー・アーム』(2014) *Million Dollar Arm*

贈賞理由

A.R.ラフマーン氏は、インドのみならず世界的にも高名な映画音楽の作曲家として、この分野の新しい可能性を切り開く優れた実績を残し、あらためて映画音楽という存在が注目されることに貢献してきた。映画のジャンルや内容に応じて、南アジアの伝統音楽、西洋のクラシック音楽、アメリカのヒップホップなど現代の大衆音楽を大胆に融合させ、甘美なメロディーを強烈なビートにのせた楽曲の数々は、氏が音楽を担当した名作映画の題名とともに、多くの人々の心に刻まれている。

1967年チェンナイ（旧マドラス）に生まれたラフマーン氏は、9歳の時に音楽家の父と死別。家計を支えるためにキーボード奏者としてさまざまな楽団で演奏し、その後英国トリニティ音楽院に特待生として留学し西洋音楽を学んだ。1987年から広告業界で作曲家としてのキャリアを開始し、多くのコマーシャル・ソングを手がけるなか、新鋭の映画監督マニ・ラトナムが氏の才能に注目して『ロージャー』（1992年）の音楽監督に抜擢、同作の大ヒットとともに映画界に衝撃的なデビューを飾った。その後、『ボンベイ』（1995年）、『ムトゥ 踊るマハラジャ』（1995年）、『ラガーン』（2001年）など、日本でも知られる諸作の音楽を手がけ、新世代のインド映画を代表する人物として認知されるに至った。

21世紀に入ると諸外国の大作に参加する機会も増え、とりわけ『スラムドッグ＄ミリオネア』（2008年）は世界的な大ヒットとともに、ゴールデン・グローブ賞、英国アカデミー賞、米国アカデミー賞など数々の映画賞を獲得。ラフマーン氏自身もインド人初のオスカー受賞（作曲賞、歌曲賞）を果たし、その名声は世界的なものとなった。

また、映画以外にも活動の場を広げ、2002年に作曲家アンドリュー・ロイド＝ウェバーの依頼でミュージカル『ボンベイドリームス』を創作。英国公演の大成功を受けて世界を巡回し、2015年には日本でも上演された。自ら楽団を率いた世界ツアーを精力的に行いながら、基金設立による恵まれない人々への支援や、チェンナイに音楽学校を創設し後進の指導にあたるなど、社会貢献活動にも尽力している。

ラフマーン氏の音楽の大きな魅力は、映画を引き立てながら、楽曲自体も一度聴いたら忘れられない甘美なメロディーと強烈なビートを併せ持っている点である。チェンナイの大衆的な映画や音楽のなかで育った氏は、青年期にスーフィズム（イスラーム神秘主義）に傾倒し、宗教歌謡カッワーリーの巨匠、故ヌスラット・ファテ・アリ・ハーン（1996 年福岡アジア文化賞芸術・文化賞受賞者）からも大きな影響を受けた。アジアと西洋、伝統と現代を大胆にアレンジし融合させる氏のユニークな創作にはこうした体験も反映されている。

このようにA.R.ラフマーン氏は、その個性的な楽曲で映画音楽の新境地を開拓して、あらためてこの分野が注目される契機をつくり、インドのみならず世界的に高く評価されている。その貢献は、まさに「福岡アジア文化賞 大賞」にふさわしい。

第27回 学術研究賞 受賞者

アンベス・R・オカンポ *Ambeth R. OCAMPO*

フィリピン ／ 歴史学（1961年生まれ）

主な経歴

1961	フィリピン、マニラ生まれ
1985 - 87	週刊誌フィリピン・デイリー・エキスプレス編集委員
1987 - 90	日刊紙フィリピン・デイリー・グローブ論説ページコラムニスト
1989	フィリピン、デ・ラ・サール大学卒業 (フィリピン学)
1989 - 2010	フィリピン大学ディリマン校専任講師
1990	デ・ラ・サール大学修士号 (フィリピン学)
1990 -	日刊紙フィリピン・デイリー・インクワイアラー論説ページコラムニスト
1993 - 97	モンセラート聖母修道院修道士
1996 - 98	マニラ歴史遺産委員会共同議長
1997 - 98	マニラ市立大学学長
1998 - 2010	フィリピン国立歴史研究所理事 (2002 - 10 年は所長)
2000	フルブライト上級研究員
2002 - 11	フィリピン国家文化芸術委員会理事 (2005 - 07 年は閣僚級の会長)
2003	京都大学東南アジア研究所客員研究員
2007 - 11	マラカニアン宮殿大統領府外交儀礼オフィス来賓責任者
2008	フィリピン工芸大学名誉博士号 (行政学)
2008 -	アテネオ・デ・マニラ大学社会科学部歴史学科准教授 (2010 - 12 年は歴史学科長)
2010	日本財団API フェローシップ フェロー
2010 - 11	フィリピン国家歴史委員会長
2014	国際文化会館及び国際交流基金 アジア・リーダーシップ・フェロー・プログラム フェロー
2015 - 17	アテネオ・アート・ギャラリー諮問委員
2015 -	国際交流基金アジアセンターの運営に関する諮問委員会委員 上智大学アジア文化研究所客員所員

主な受賞歴

1990 ナショナル・ブック・アワード エッセー部門
1992 ナショナル・ブック・アワード 文学史部門
1993 ナショナル・ブック・アワード 書誌部門
1997 フィリピン・ジェイシース・ロクサス財団、優秀な青年10 人 歴史部門
2007 スペイン王国、文民功労勲章
2008 フランス政府、芸術文化勲章オフィシエ
2010 フィリピン共和国、グランドクロス、ラカンドゥラ勲章
2013 フィリピン共和国、大統領メリット勲章
2014 メトロポリタン銀行財団継続優秀賞 (教職)
2015 ホアン・D・ネポムセノ研究賞・奨学金
2016 Gawad Tanglawベスト・コラムニスト賞
(フィリピン・デイリー・インクワイアラー論説ページコラム)
2015年にも同賞受賞

主な著作

Looking Back, フィリピン: Anvil Publishing, 1990. (改訂, 2009)
Rizal Without the Overcoat, フィリピン: Anvil Publishing, 1990. (改訂, 2011)
Makamisa: The Search for Rizal's Third Novel, フィリピン: Anvil Manila, 1992. (改訂, 2008)
A Calendar of Rizaliana in the Vault of the Philippine National Library, フィリピン: Anvil Publishing, 1993;改訂版, フィリピン: University of Santo Tomas Publishing House, 2011.
Talking History: Conversations with Teodoro A. Agoncillo, フィリピン: De La Salle University Press 1995;改訂版, フィリピン: University of Santo Tomas Publishing House, 2011.
Chulalongkorn's Elephants: The Philippines in Asian History, フィリピン: Anvil Publishing 2011; 改訂版2015.
Two Lunas, Two Mabinis: Looking Back 10, フィリピン: Anvil Publishing, 2015.

贈賞理由

アンベス・R・オカンポ氏は、優れた歴史学者であり、大学教員、新聞や雑誌のコラムニスト、歴史文化行政の責任者や顧問として、フィリピンの学術・文化・社会の発展に大きく貢献している知識人である。フィリピンの歴史が、スペインと米国の植民地支配を受けたことにより、広くグローバルなネットワークのなかで展開してきたことを分かりやすく説明し、開かれたナショナリズムの発展とアジアや欧米との国際交流の推進に尽力している。

オカンポ氏は、1961年マニラに生まれ、デ・ラ・サール大学でフィリピン学の修士号を取得。1985年から新聞や雑誌などで歴史と文化に関する連載コラムやエッセーを書き始め、それらを『Looking Back（過去を振り返る）』（1990年）と『Rizal Without the Overcoat（外套を脱いだリサール）』（1990年）の2冊にまとめて出版し好評を博した。その後、ロンドン大学アジア・アフリカ研究学院への留学、マニラにあるモンセラート聖母修道院での修道生活を経て、再び教育、文筆、講演などの活動に戻り、今までに20 冊を超える著作を発表している。

著作の内容は、19世紀後半にスペイン植民地統治の改革を目指すプロパガンダ運動を推進したホセ・リサールをはじめ、その運動が急進化して1896年の独立革命へと発展してゆく際に活躍したアポリナリオ・マビニ、アントニオ・ルナ、エミリオ・アギナルドらの指導者に関するものと、広く近現代史の諸側面に関わるものとに分けることができる。

いずれの著作も、英雄や偉人とされる人物の思想や言動を分かりやすく解説すると同時に、彼らを喜怒哀楽の感情をもつ等身大の人間として描くことを通して、また彼らの生活の諸相や、時代の気分、文化の香りまでを具体的な質感をもって書き込むことにより、歴史を活き活きとした物語として市民に提供している。これにより、幅広い世代の市民が、歴史を身近に感じ、過去への関心を持ち続けることに大きな役割を果たしている。オカンポ氏は、これらの著書や、メディアを通した活発な発言等を通じて、歴史を市民の共有財産とし、またフィリピンの歴史を作った運動家や指導者たちが、欧米や近隣アジアとの密接な交流と交友の中で活動したことを示すことで、市民の開かれた国民意識と国際感覚を育むことに寄与している。

また、フィリピン国立歴史研究所長（2002年-10年）、フィリピン国家歴史委員会長（2010年-11年）、アテネオ・デ・マニラ大学歴史学科長（2010年-12年）等を歴任し、とりわけフィリピン国家文化芸術委員会長在任時（2005年－07年）にはベトナム、パキスタン、北朝鮮と文化協定を結び、中国、フランス、メキシコと文化人交流プログラムを締結するなど、文化行政や教育面での貢献も大きい。

歴史を市井の人たちの身近なものへと取り戻し、フィリピンの開かれたナショナリズムと国際感覚の育成に寄与しながら、国際文化交流に多大な貢献をしてきたアンベス・R・オカンポ氏は、まさに「福岡アジア文化賞 学術研究賞」にふさわしい。

第27回 芸術・文化賞 受賞者

ヤスミーン・ラリ *Yasmeen LARI*

パキスタン ／ 建築（1942年生まれ）

主な経歴

1942	パキスタン、パンジャーブ州デラ・ガージ・カーン市生まれ
1963	オックスフォード建築学校（現オックスフォード・ブルックス大学）卒業（建築学）
1964 - 2000	建築事務所「ラリ・アソシエイツ」設立、代表
1969	王立英国建築家協会メンバーに選出
1980 - 83	パキスタン建築家協会会長
1980 -	パキスタン・ヘリテージ財団共同設立、会長
1983 - 86	パキスタン建築家・都市設計家協議会初代会長
1994 - 97	パキスタンシンド州の文化遺産保護法が制定され、パキスタン・ヘリテージ財団が報告したカラチの歴史的建築物600件が文化財保護の対象となる
2003 - 05	ユネスコナショナルアドバイザー（世界危機遺産ラホール城塞 シシュ・マハールプロジェクト）
2004	アメリカ、アショカフェロー
2005 -	パキスタン・ヘリテージ財団人道支援部を設置 2005年パキスタン大地震被災者支援プログラム「Heritage for Rehabilitation and Development(復興および開発のためのヘリテージ)」を開始（ノキア・シーメンス・ネットワークとの共同プロジェクト）
2007 - 14	パキスタン地震救援復興局理事
2009	パキスタン、マルダンに国内避難民キャンプ設立
2010	紛争後のスワートにおいてユネスコ助成による女性エンパワメントプログラムリーダー
2015	第1回シカゴ・ビエンナーレ国際建築に出展
2016	王立英国建築家協会主催建築展示会「災害からの創造」に出展

主な受賞歴

2006 パキスタン政府より第三勲章Sitara-i-Imtiaz
2011 ナショナル・ヒーロー財団主催
　第1回パキスタンワンダー・ウーマン・オブ・ザ・イヤー
2013 第8回イスラム開発銀行賞（パキスタン・ヘリテージ財団）
2014 パキスタン政府より第二勲章Hilal-i-Imtiaz

主な設計建築物

タージ・マハールホテル（1981）
パキスタン金融貿易センター(1983-89)
パキスタン国営石油会社本社ビル(1985-91)
ABN アムロ銀行ビル（2000）

主な文化遺産保護活動

1981	カーイデ・アーザム邸美術館（19世紀）、カラチ
2003-05	世界遺産ラホール城塞(ユネスコ 危機遺産 シシュ・マハールプロジェクト)、ラホール
2012	Samma Noble I墓（15世紀）、世界遺産登録地マクリ
2014-16	スルタン・イブラヒムおよび アミール・スルタン墓（16世紀）、世界遺産登録地 マクリ

主な著作

Traditional Architecture of Thatta, カラチ：ラリ・リサーチ・センター，1989.
The Dual City: Karachi During the Raj（共著），オックスフォード出版，1997.
The Jewel of Sindh: Samma Monuments on Makli Hill（共著），パキスタン：オックスフォード出版，1997.
Kurrachee: Past, Present and Future（共著），オックスフォード出版，1998.
Karachi: Illustrated City Guide, オックスフォード出版，2001.
Governor's House Lahore, Punjab Government, Lahore, 2008.
Build Back Safer with Vernacular Methodologies, パキスタン・ヘリテージ財団，2011.

主な人道支援活動

Heritage for Rehabilitation and Development（復興および開発のためのヘリテージ）
　-2005年パキスタン大地震被災者支援プログラム
　（ノキア・シーメンス・ネットワークとの共同プロジェクト）
Build Back Safer with Vernacular Methodologies(土着的手法によるより安全な再建)
　-洪水被災者のための二酸化炭素ゼロシェルター・プログラム
　（国際移住機関と4万戸のシェルターを建設，2012-14）
Lari Adobe Green Shelter(ラリ式日干しレンガのグリーン・シェルター)
　- 2013年および2015年の地震のために設計した土・竹および石灰を使用したシェルター

贈賞理由

ヤスミーン・ラリ氏は、パキスタン初の女性建築家として多くの現代建築を手がける一方、パキスタン・ヘリテージ財団を創設し、歴史的建造物の保存と修復活動を行ってきた。また、2005年パキスタン大地震の際に開始した被災者支援プログラムを契機に人道支援活動へも力を注ぎ、同国における社会文化活動の先駆的な女性リーダーとして、歴史遺産保護と災害に強い社会づくりにおいて極めて重要な役割を果たしている。

ラリ氏は1942年、パキスタンのパンジャーブ州に生まれ、都市開発等を担当していた官僚の父の勧めで建築家を目指す。英国オックスフォード建築学校（現オックスフォード・ブルックス大学）で建築学を学んだ後に帰国し、1964年同国初の女性建築家として建築事務所を設立した。住宅や商業ビル等の現代建築を手がける一方、スラム街や不法居住者の生活改善や低コスト住宅の設計にも取り組んだ。1969年王立英国建築家協会メンバーに選出され、その後もパキスタン建築家協会会長、パキスタン建築家・都市設計家協議会初代会長を歴任し、同国における現代建築と都市開発に大きな影響を与えた。この間、カラチの金融貿易センター（1989年）、パキスタン国営石油会社本社ビル（1991年）等のデザインを手がけ『20世紀における世界の建築』（美術出版社ファイドン（英国）2012年）にも選ばれている。

また、ラリ氏は、1980年パキスタン・ヘリテージ財団を創設し、同国の歴史的建造物や文化遺跡を数多く保護してきた。1994年には同国シンド州の文化遺産保護法が制定され、600もの歴史的建造物を文化財保護の対象とすることにも貢献し、カラチの都市形成及び建築物の歴史に関する著作を多数執筆することで、同国の文化財の再発見・再評価と保存に大きな役割を果たしている。

さらに、2005年パキスタン大地震の復興に向けて、被災者支援プログラムを開始し、これを機に人道支援活動も手掛けるようになる。ラリ氏が提供するシェルターは、石灰や竹など現地調達可能な材料と土着的な手法を用いていることから、二酸化炭素の排出量が非常に少なく、被災者自らが簡単につくることができる。同時に、氏は女性やこどもの貧困問題にも取り組み、社会的弱者が自立するための能力向上支援も行っている。

このようなラリ氏の活動は社会的に高く評価され、2006年「ユネスコの60年に貢献した60人の女性」に選出され、2013年には、経済開発における女性の貢献を称える「第8回イスラム開発銀行賞」をパキスタン・ヘリテージ財団が団体として受賞。さらに氏は、国連防災世界会議をはじめ、さまざまな国際会議の招待パネリストとしても被災地における建設・開発と文化遺産保護のあり方について重要な発言を重ねており、2015年第1回シカゴ・ビエンナーレ国際建築展では国内避難民キャンプの低コスト住宅プロジェクトを出展し世界的な注目を集めた。

このようにヤスミーン・ラリ氏は、パキスタン初の女性建築家として女性の社会的活躍に先駆的な道筋を与えながら、且つ文化遺産保護と災害に強い社会づくりに対してきわめて創造的な活動をしてきた。その貢献は、まさに「福岡アジア文化賞 芸術・文化賞」にふさわしい。

第27回福岡アジア文化賞 授賞式

■日時：9月16日（金） 18:30～20:00　■会場：アクロス福岡 シンフォニーホール

式　次　第

第1部 受賞者紹介

主催者代表挨拶 …… 福岡市長　**髙島 宗一郎**
お言葉 …… **秋篠宮殿下**
選考経過報告 …… 福岡アジア文化賞審査委員会委員長　**久保 千春**
贈賞 …… 福岡市長　**髙島 宗一郎**
　（公財）福岡よかトピア国際交流財団理事長　**礒山 誠二**
市民代表お祝いの言葉

第2部 受賞者挨拶とインタビュー

特別披露 **大賞受賞者A.R.ラフマーン氏と福岡西陵高等学校管弦楽部による共演**
　曲目「ボンベイテーマ」「オルヴァン・オルヴァン」「モーサム＆エスケープ」「ジャイ・ホー」
閉式

第27回福岡アジア文化賞　授賞式

大賞受賞者A.R.ラフマーン氏と福岡西陵高等学校管弦楽部による共演

第27回福岡アジア文化賞授賞式は、映像による歴代受賞者の紹介と、福岡西陵高校管弦楽部によるオープニングファンファーレで幕を開けました。

秋篠宮同妃両殿下ご臨席のもと、インド、パキスタン、フィリピン、ベトナムなど各国の来賓や各界関係者、市民など約1,100名の観客が見守る中、市民が贈る福岡アジア文化賞にふさわしく、受賞者は客席を通ってステージへ。手を伸ばせば届くほど受賞者と観客との距離が近く、華やかさの中にも温もりのあるその雰囲気は、ホスピタリティマインドあふれた福岡らしいオープニングとなりました。

最初に髙島宗一郎福岡市長が挨拶。この賞は、アジアの学問や芸術・文化に光をあてる国際的な賞として大変貴重であり、100名を超える受賞者からアジアを理解するための示唆を得ると同時にアジア地域の人々の交流に大きく貢献していると紹介。文化の振興、相互理解及び平和への貢献という、福岡アジア文化賞の精神が浸透していくことを祈念すると結びました。

続いて秋篠宮殿下より受賞者へのお祝いの言葉を賜り、審査委員長の久保千春九州大学総長より選考経過が報告されました。大学院生からお祝いの言葉、福岡インターナショナルスクールの子どもたちから花束が贈られると、緊張気味だった受賞者の顔に笑みがこぼれ、観客からも大きな拍手が送られました。

第2部は受賞者による喜びのスピーチが行われました。また、事前に市民から寄せられた質問をもとにインタビューが行われました。そして、A.R.ラフマーン氏と福岡西陵高校管弦楽部との夢の共演が実現。受賞者も観客もラフマーン氏の音楽の世界に酔いしれる、今まで以上に華やかな授賞式となりました。

オープニングファンファーレ

髙島福岡市長による主催者代表あいさつ

久保九州大学総長による選考経過の報告

客席を通って登壇する受賞者

花束贈呈

大賞のA.R.ラフマーン氏への贈賞

学術研究賞のアンベス・R・オカンポ氏、芸術・文化賞のヤスミーン・ラリ氏への贈賞

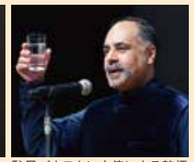
祝賀会

授賞式に引き続いて各国の来賓、各界関係者など多数の参加者を得て祝賀会を開催。

礒山誠二福岡よかトピア国際交流財団理事長が「本日も新しい出会いが生まれ、長くご縁が続いていくことを願っています。」と開会を宣言。続いて駐日インド大使のスジャン・R.チノイ氏による来賓あいさつ、駐日パキスタン大使のファルーク・アーミル氏による乾杯で祝宴がスタートし、各受賞者と同伴者を囲んでにぎやかな談笑が広がりました。最後はこの日誕生日だったラフマーン氏のご令嬢、ラヒーマ氏にサプライズ演出でバースデーケーキとプレゼントが贈られ、参加者全員で祝福しました。

礒山理事長による開会あいさつ

駐日インド大使による来賓あいさつ



駐日パキスタン大使による乾杯

秋篠宮殿下お言葉

本日、第27回福岡アジア文化賞の授賞式が開催されるにあたり、受賞される3名の方々に心からお祝いを申し上げます。

近年、国際社会におけるグローバル化が進展する中、多くの国や地域では、画一化された思考方法や利便性を求めた生活様式が広まってきております。しかし、そのいっぽうでは、固有の文化や伝統などを継承しつつ、新しい文化の創造にも多くの力を注いでおります。

また、アジアには多様な風土や自然環境が創り出し、長い期間にわたって育まれてきた各地固有の歴史や言語、民俗など、文化の深さや豊かさがあり、それらを保存し継承していくことの大切さを強く感じます。

このようななか、古くからアジアの各地で受け継がれている多様な文化や芸術を尊重し、その保存と継承に貢献するとともに、新たな文化・芸術の創造、そしてアジアに関わる学術研究に寄与することを目的とした福岡アジア文化賞は、それらに功績のあった方々を顕彰する大変意義深い事業であると言えましょう。

本日受賞される方々の優れた業績は、アジアにおける未来の発展に貢献するものであることは勿論のこと、それとともに、アジアのみならず、広く世界に向けてその意義を示すものでもあります。そして、社会全体でこれらを共有し、次の世代へと引き継いでいくことは、私たちにとっての貴重な財産になるものと考えます。

終わりに、受賞される皆様に改めて祝意を表しますとともに、この福岡アジア文化賞を通じて、アジア諸地域に対する理解、そして国際社会の平和と友好が一層促進されていくことを祈念し、私のあいさつといたします。

受賞者あいさつ

大賞　A.R.ラフマーン

日本製楽器で生計を立てた思い出から受賞の喜びへ

秋篠宮同妃両殿下、福岡市長、福岡アジア文化賞委員会、大使、福岡の皆様、ありがとうございます。私は、若い時に父を亡くし、日本製のキーボードを使って音楽で生計を立ててきました。それがこのように日本で表彰されることになるとは、思いもしませんでした。

インドは、ガンジーたちのおかげで民主主義を標榜し、彼らの足跡を追い、そしてまた日本からもたくさんのことを学びました。

日本は大災害に苛まれ、それを乗り越えられた経験は世界の人々の教訓となっています。私たちは対立が起こっても、未来のために立ち上がらなくてはなりません。日本がそのことを私たちに教えてくれました。これは非常に大きな教訓です。地震が起こった後、あたかも何も起こらなかったかのように、皆さんは前に進んでいきました。その姿から私たちは学ぶことが多いと思いました。

日本から素晴らしいインスピレーションを得ることができ、またこのような賞をいただき、ありがとうございます。

母国インドに対してもお礼を申し上げます。私に音楽を教えてくれた先生や私の両親、そして娘にも。

皆さん、本当にありがとうございました。

Interview

質問：どのような時に詞や曲が浮かびますか。

ラフマーン氏：良いストーリーや良い人に出会った時に浮かびます。また自然や、スピリチュアルなものからもインスピレーションを得ます。飛行機に乗っている時や電話をかけている時にふと思いついて、いきなり歌いだしたりもするんですよ。

質問：曲づくりで苦労した経験はありますか。

ラフマーン氏：例えば自分の心は沈んでいるのに幸せな気持ちになる作品を作らなければいけない時があります。そのような時は、自分の心をだましながら作らなければなりません。「来週まで」と締切を言われても、自分の気持ちがそういう状態にない時があります。しかし、プロとして、イライラしても悲しくても作品に集中しなくてなりません。心のありようを変えなければならない。それが一番大変です。しかし、ほとんどの場合、うまくいきます。

学術研究賞　アンベス・R・オカンポ

今、そして未来につながる歴史を市井の人々の手に

受賞に対し大きな喜びを感じる一方、この賞に恥じない卓越性を継続できるかという不安が押し寄せています。

歴史学とは、ぼろぼろの文書、埃をかぶった書物、壊れた遺物のわずかな痕跡をつなぎ合わせ「過去」という一つの絵を見ていく作業です。歴史学者は修道士に似て孤独です。自己不信に陥り、私の仕事は理解してもらえるのか、過去についての研究は現在に意味をなすのかと自問もします。この受賞により今までの苦労が無駄ではなかったと思うことができ、心より感謝申し上げます。

私の研究は、19世紀後半のフィリピンにおける芸術、文化、建国に関わった男女に焦点をあてたものです。私は、グローバル化する世界の中で祖国の人、とりわけ若い人が国民としてのアイデンティティーを見いだす後押しをしたいと思っています。

私が学術誌に執筆しないのは、一般の人を巻き込むべきだと考えたからです。時には学問を象牙の塔から引き出し、人々の手に戻さなければなりません。歴史は授業後すぐ忘れていいものではありません。歴史は過去をもとに現在を理解し、不確かで未知の未来に向き合うための一つの手段になります。歴史学者の仕事は、人々が過去にとらわれすぎず、過去の記憶とともに未来へ進んでいくようにすることです。

この賞は、私と私の仕事だけでなく祖国と国民、私の家族、友人、恩師、同僚、読者、そして私に否定的だった人たちを称えるものです。彼らの批判があったからこそ、私は良き歴史学者、執筆者、人間になれました。彼らとこの賞を分かち合いたいと思います。本当にありがとうございました。

Interview

質問：歴史学者を志したきっかけは何ですか。

オカンポ氏：教師の教え方やテキストが気にいらず、自分が教師になろうと思いました。歴史は現在が過去と関係していることを示すものでなければなりません。

質問：フィリピンと日本の関係をどのように感じていますか。

オカンポ氏：先の大戦では両国が多くの犠牲を払い、この恐ろしい体験を経て両国の関係は前へ進みました。1960年代には複雑な思いを持ちながらも友情関係を築き、これこそ未来に続く財産になります。

質問：民間交流を推進するために必要なものは何でしょうか。

オカンポ氏：人々が互いを身近に感じることが大切です。それには文化、音楽、歴史が重要な役目を果たします。これらを通して各国の心に触れることができ、両国の距離は縮まって、互いがより良い友人になれると考えます。

芸術・文化賞　ヤスミーン・ラリ

災害に備える知識を世界へ伝えたい

秋篠宮同妃両殿下、大使閣下、ご来賓の皆様、芸術・文化賞を受賞し大変光栄に思います。

文化こそが、我々にアイデンティティーを与え、社会の結び付きを強め、持続的な成長を支えるものです。

モヘンジョダロ、マクリの墳墓群やラホールの城塞、タッター、ペシャワールなどの城塞都市、パキスタンにはたくさんの素晴らしい文化遺産があります。

また、パキスタンでは、土地固有の伝統、工芸の技能が母から娘へ伝えられています。これは、次世代のために寛容と平和の文化を永続させる知恵だと私が信じるものです。

紛争と大災害に満ちた世界で、今日私は、母国の偉大な人道主義者や、ノーベル賞受賞者であるマララ・ユスフザイとアブドゥッサラーム博士らにならい、またパキスタン建国の父であるムハンマド・アリー・ジンナーのビジョンのもと、人生を人類のために捧げております。

この栄誉は、裏返せば地球温暖化やパキスタンと日本が苛まれている災害の脅威を浮き彫りにします。災害に備える知識を日本からパキスタンへ広げ、さらにパキスタンが推進する環境に優しい仕組みを世界中に広めていかなければなりません。

福岡アジア文化賞委員会の皆様にはこの素晴らしい賞を授与くださったこと、祖国パキスタンには、環境に優しい社会の実現にむけて持続可能なモデルをつくり、コミュニティと共に働く機会を与えてくださったことに感謝します。また、両親、夫、子どもにも、その生涯にわたるサポートに深く感謝します。最後に、私の呼びかけに応じ、苦難に立ち向かいながらも、並外れた創造力と勇気を見せてくれた、数多くの虐げられたパキスタン女性に多大な敬意を表したいと思います。

Interview

質問：女性の社会進出に対して、どう思いますか。

ラリ氏：私の時代は困難を感じることもありましたが、今は女性が挑戦できない分野はなく、世界は変わりました。良いことです。

質問：2005年のパキスタン大地震を機に支援活動を行っていらっしゃいます。人々の安全のために重視していることは何ですか。

ラリ氏：災害は生命や財産を奪います。それを防止するには石灰や竹で二酸化炭素を排出しない強固な建物を造ることです。私は安価で安全な建物を造っています。

質問：女性や子どもの問題に取り組んでいて思うことは？

ラリ氏：災害に対し、女性が意識されていないのは問題です。災害の備えとして大事なことは、皆が動けるようになること。自分や家族の命を自分たちが救うという意識、権限を男性に限らず女性も持つことです。女性が自助、自立を学ぶことが必要です。

大賞

A.R.ラフマーン

インド ／ 音楽　A. R. RAHMAN

市民フォーラム

From the Heart ～A.R.ラフマーンの音楽世界～

■開催日／2016年9月17日(土)　17:00～19:00
■会　場／アクロス福岡地下2F　イベントホール
■参加者／600人

〈第1部 対談〉

アジアと西洋、伝統と現代を融合し人々の心を打つ音楽をこれからも

●対談者
サラーム海上
（音楽評論家、作家、DJ）

●コーディネーター
石坂 健治
（日本映画大学教授、東京国際映画祭アジア部門ディレクター）

冒頭、石坂健治氏がラフマーン氏の功績を紹介し、「映画音楽の枠を超えた、ベートーベンやビートルズに比肩するアーティストである」と氏の音楽性と実績を称えました。

対談では、サラーム海上氏がラフマーン氏のプロとしての30年を写真や映像で振り返りながら、氏に質問を投げかけていきます。

◇独自の音楽スタイルをどのように確立したのか⇒「インドの伝統音楽と西洋のロック音楽を融合させて、自分たちのような若い世代の感性に合う音楽をつくろうと思った。」

◇映画音楽作曲へのアプローチ方法について⇒「映像を観ていろいろな考えを高めていき、自らの創造力を含めてストーリーに反映させている。」

◇宗教歌謡カッワーリーへの思いについて⇒「先進的で忘れてはいけない心。聴くと元気が出て非常に心が高揚する。私の音楽はヌスラット・ファテ・アリー・ハーン氏から始まった。」

対談の内容は多岐にわたり、聴衆はサラーム氏の質問に丁寧に答えるラフマーン氏の一言一言に熱心に耳を傾けていました。

〈第2部 ライブ演奏〉

出　演　ピアノ:A.R.ラフマーン、シタール:アサド・カーン(ASAD KHAN)、ベース:モヒーニ・デイ(MOHINI DEY)、ヴォーカル:ジョニータ・ガンディ(JONITA GANDHI)

曲　目
1.「Mausam & Escape（モーサム&エスケープ）」映画『スラムドッグ$ミリオネア』より
2.「Naane Varugiraen」　映画『OKダーリン』より
3.「Agar Tum Saath Ho（あなたがいてくれたら）」映画『Tamasha（見世物）』より
4.「Tu Hi Re（あなただけが）」　映画『ボンベイ』より
5.「Latika's Theme（ラティカのテーマ）」映画『スラムドッグ$ミリオネア』より

ラフマーン氏をはじめとするアーティストの熱演に、演奏終了後の会場は歓声とスタンディングオベーションに沸きました。

学校訪問

■実施日／9月15日(木) 10:00～11:00
■会　場／福岡第一高等学校(音楽科)

全校生徒の歓迎を受けた後、音楽科生徒の合唱に出迎えられたラフマーン氏。生徒の前に立ち、挨拶の後すぐに「私に質問はありませんか」と話しかけます。「日本のどんなところが好きですか？」との質問に、「黒澤明監督の大ファンで、ホラー映画も大好き。音楽では坂本龍一さんを尊敬している」「日本は伝統文化やアイデンティティーを保持する一方で、世界のあらゆる文化の要素をうまく取り入れている点が素晴らしい」と答えました。

映画音楽の作曲に関する質問には、「脚本を読み込んでしっかりと頭に入れ、映像やセリフで表現されない感情を音楽で表現するのだ」と説明しました。

続いてラフマーン氏はピアノに向かい、インド音楽を5つのモードで演奏。聴いてどういう気分になるか生徒たちに尋ね、生徒の回答に対して一つ一つ丁寧にコメントを返しました。

最後に「皆さんの素晴らしい成功を祈っている。成功をつかむため頑張って」と生徒たちを激励しました。

学術研究賞

アンベス・R・オカンポ

フィリピン ／ 歴史学　Ambeth R. OCAMPO

市民フォーラム

歴史における記憶と忘却～日本とフィリピンの関係から考える～

■開催日／2016年9月18日(日)　11:00～13:00
■会　場／アクロス福岡地下2F　イベントホール
■参加者／200人

〈第1部 基調講演〉

過去の何を記憶し、何を忘れるのか。未来に向けた歴史のとらえ方を提議する

この受賞を機にこれまでの人生を振り返り、歴史家になった理由、過去が現在と未来にとって必要な理由を考えました。皆さん、歴史学は自分に必要ないものとお考えでしょうが、我々が未来に向かううえで歴史は非常に重要なものです。

私は子どものころ、1970年の大阪万博でフィリピンのパビリオンや、他の国旗に並んではためくフィリピン国旗を見て心躍ったことを覚えています。万博は、私の目を世界の文化の多様性や国のアイデンティティーへと向けてくれました。

私は幼少期にフィリピンで『隠密剣士』を見ましたし、私の伯父は親日家でした。しかし、日本の占領下で日本軍に身内を殺されたフィリピン人もいて、世代により日本観は違います。日本人は原爆投下を被爆者として覚えているでしょう。しかし、東南アジアでの日本軍の行動は言及されず、互いの記憶にギャップがあります。

日本とフィリピンの歴史をもっと遡ると、16世紀末には既にフィリピンに1000人超の日本人が住み、交易商人、職人、ボディーガードなどをしていました。また、ルソン壺、キリシタン大名の高山右近、日本に滞在したマリアノ・ポンセやアルテミオ・リカルテといった歴史上の人物の例が示すように、様々なレベルで深いつながりがあります。

役に立たないちょっとした情報も集めることによって、私たちはもっと歴史的なつながりを理解し、洞察を生むことになると思います。歴史の何を記憶し、なぜそれを記憶するのか。私たちは過去の記憶によって現在を理解し、未来について考えをめぐらすことができます。最後にフィリピンの国民的英雄ホセ・リサールの言葉を紹介します。「過去の記憶を持って未来へ向かっていこう」。

〈第2部 パネルディスカッション〉

●コメンテーター
藤原 帰一
（東京大学・大学院法学政治学研究科教授）

●コーディネーター
清水 展
（京都大学東南アジア研究所教授）

反日感情を乗り越えて交流が続く二国間に必要なものとは

藤原氏は、マルコス政権が倒れて間もない1989年、学会でオカンポ氏が人柄や服といったトリビアの詰め合わせのような独自の視点から国民的英雄ホセ・リサールを語る姿に驚いた、と第一印象を披露。過去を空想することを拒み、歴史の姿を捉えることに努めてきた、と氏について語りました。質疑応答では、戦後の反日感情を乗り越えて日比関係が友好的になっている理由、ドゥテルテ大統領の反米的な発言の背景、日本とフィリピンがよい関係を築いていくために気をつけたらよいこと、という会場からの質問にオカンポ氏は穏やかに語りかけていきました。藤原氏は、オカンポ氏のように「なぜだろう？」「知りたい」という好奇心を持ち相手のことを知ることが我々の将来を作っていく土台になるのだろう、と締めくくりました。

学校訪問

■実施日／9月16日(金) 10:00～11:00
■会　場／上智福岡中学高等学校

オカンポ氏は自身が歴史家になった理由を、読書好きで好奇心旺盛だったからと語り、ホセ・リサールの足跡を追い、英国の図書館で100年前にリサールが手にした本を見つけて興奮した様子を生き生きと話しました。

また、リサールが来日してメモを残していることや、今のフィリピンの人々の生活に浸透している蚊取り線香や氷菓が日本と関わっていることを伝え、日本とフィリピンとの意外なつながりを話しました。日記をつけ自分の歴史を振り返ることで誰もが歴史家になれると話し、歴史の面白さを説きました。

生徒たちは、ドゥテルテ大統領や原爆投下に対する意見、旧宗主国への思いについて英語で次々と質問。オカンポ氏はわかりやすい言葉で「大統領は犯罪者に厳しいが、人権は守られるべきではないか」「被爆国という一方の角度だけから物事を見ないように」「第二次世界大戦だけでなく、時代を遡って日本とフィリピンの長い交流を見ることが大切」など丁寧に回答。オカンポ氏の生きた歴史の授業に生徒は耳を傾けていました。

ヤスミーン・ラリ

パキスタン ／ 建築　Yasmeen LARI

市民フォーラム

災害から創造的復興へ～素足の被災者を蘇らせたラリの草の根建築デザイン～

■開催日／2016年9月18日(日)　14:00～16:00
■会　場／アクロス福岡地下2F　イベントホール
■参加者／200人

〈第1部 基調講演〉

現地の自然素材と土着的な手法で援助への依存から自立の文化へ

私が会長を務めるパキスタン・ヘリテージ財団は、文化遺産の管理をするだけでなく人道支援活動も行っています。パキスタンには多くの古代遺産があり、それは青銅器時代、インダス文明の時代、ガンダーラの仏教文化といった時代にさかのぼります。そうした時代の建築物は強く強靭性に富むものであり、それらの遺産を保存し、さらに、遺産に関する知識を広げていく様々な活動を行っています。

また、8万人が犠牲になり、40万の家族が家を失った、2005年パキスタン大地震をきっかけに、私は、“素足の建築家”として人道支援活動にも取り組むようになりました。2010年以降も、パキスタンでは毎年のように洪水や風水害、地震などが発生し、常に留意しておかなければならない状況です。さらに、パキスタンは発展途上の国であり、多くの人が貧困状態にある中で、国際社会からの援助への依存が増しており、被災者の自尊心がなくなり、自立心が欠如している状態に陥っています。これは本当に深刻かつ重大な問題です。

その対策として、私は、シェルターを被災者と協力して設計し、現地で調達可能な粘土・石灰・竹などの自然素材を使用し、土着的な手法で造る“草の根建築”を推進しています。このシェルターは費用がほとんどかからず、被災者自身で建てることができるため、援助への依存の体質を自立の文化へ変えることができます。また、粘土・石灰・竹といった自然素材を用いているため、二酸化炭素排出量が非常に少なく、地球環境にも優しいものです。

私が考えた自然災害後の復興のための原則があります。まずは、文化遺産と伝統を利用し、誇りと自信を育てるということ。次に、持続可能な材料を使用し、環境悪化を防ぐということ。さらに、現地の材料と技術を使用し、素早く届けるということ。最後に、災害リスク軽減法を考案・具体化し、次の災害に耐えるということです。

パキスタンでは多くの人が貧困状態にありますが、災害時には、特に子どもたちや女性が被害を受けます。私は、子どもや女性のためのエンパワーメントにも力を入れており、住宅だけでなく、衛生的に家事ができる無煙かまどのキッチンやエコトイレをわずかな費用で造る技術なども教えています。

私はこれからも被災者に寄り添い、被災者の自立に役立つような活動を続けていきたいと思います。

〈第2部 パネルディスカッション〉

●対談者
森 まゆみ
（作家）

●対談者
深澤 良信
（国連ハビタット福岡本部長）

●コーディネーター
藤原 惠洋
（九州大学大学院芸術工学研究院教授）

災害への備えや復興の在り方をあらためて問い直すきっかけに

基調講演を受けて藤原惠洋氏は、「被災者に寄り添い、主体性や自立性を奮い立たせるラリ氏のシェルターは、日本の仮設住宅の在り方とはずいぶん違う」と感想を述べました。作家の森まゆみ氏は、東日本大震災後の自身の被災地での活動内容を紹介し、日本の復興の在り方に疑問を投げ掛ける一方で、ラリ氏が設計したシェルターを「環境問題までを見据えた私たちの行くべき未来」と高く評価しました。深澤良信氏は、国内外で数々の災害復興支援に関わってきた経験や、国連ハビタットの活動内容を紹介し、「復興に大切なのは被災者自身が元気になること。コミュニティーの力が高まれば、支援事業が終わっても次に進める」と、ラリ氏の考えに共鳴しました。それらを受けてラリ氏は、「被災者の自助や心の復興は重要な観点」「救済だけでなく、災害前の備えを世界中でやるべき」などと力説しました。

フォーラムの前日に熊本地震の被災地に赴いた様子も紹介され、ラリ氏は「あれだけの大地震にもかかわらず躯体自体はしっかり残っていた。竹の土台でできている建築物は本当に素晴らしい」と感想を述べました。会場からの「パキスタンと日本が一緒になって取り組めることは？」という質問に対しては、「伝統的な建築を生かしながら、それをさらに強くする方法を考えることが重要だ」と回答。最後に藤原氏が「私たちが協同してやれることはたくさんある。今度は実際の現場でご一緒しましょう」と述べて市民フォーラムを締めくくりました。

学校訪問

■実施日／9月15日(木) 11:00～12:00
■会　場／福岡市立福岡女子高等学校

ラリ氏は、創立90年以上の福岡女子高等学校を訪れて、「素敵な景色があって素晴らしい校舎だ」と称した後、パキスタンの文化遺産の写真を見せながら母国について説明しました。

その後、学生時代の苦労話を披露しながら自らが手がけた建築物を紹介。富裕層向けの大規模なビルから一転、母国での大震災の経験を経て、現在は貧困層向けの家などを作っていると話しました。災害から身を守るための建築物と、女性の自立や地位向上という二つの課題解決に同時に取り組むラリ氏の熱意と行動力は、生徒たちの心に響いたようでした。

学生から「どんな夢を持ってますか」と問われたラリ氏は「たくさんの夢がある」と笑って答え、「諦めずに一生懸命やれば夢は叶う」と励ましました。またパキスタンで活躍する女性たちを例に挙げながら、「女性は家事、育児、仕事という3つの役目を持っているが、その中でより多くのことを成し遂げられるように努力すべき。自信をもって一番高い山に登ってほしい」と、メッセージを送りました。

国際交流基金アジアセンターとの共催企画

『天神アピチャッポンプロジェクト（TAP）ショートフィルム共同制作ワークショップ with アピチャッポン監督』

アピチャッポン・ウィーラセタクン監督（2013年受賞者）と福岡にゆかりのある映像クリエイターたちが「天神」をテーマにショートフィルムを共同制作。また、完成作品「光の記憶」などの上映やトークショーも開催しました。

◆日　時：平成28年4月15日(金)～17日(日)
◆会　場：福岡アジア美術館　あじびホール
◆参加者：150人
◆協　力：福岡インディペンデント映画祭実行委員会、福岡フィルムコミッション、福岡アジア美術館
◆企画・運営：西谷郁
◆協同制作クリエイター：水江未来（アニメーション作家）
幸洋子（アニメーション作家）
橘剛史（映像作家）
他10名の地元クリエイター

ワークショップの様子

トークショーの様子

『レイナルド・C・イレート氏 講演会』

日本・フィリピン国交正常化60周年を記念し、歴史学者のイレート氏（2003年受賞者）による講演会を開催しました。長く深い歴史を注意深く学ぶことの重要性が心に残る講演会となりました。

レイナルド・C・イレート氏

東京講演会「フィリピン史の中の日本の立ち位置を再考する」

◆日　時：平成28年7月20日(水) 19:00～21:00　◆参加者：80人
◆会　場：国際交流基金 JFICホール（東京都新宿区）
◆登壇者：寺田勇文 氏（上智大学総合グローバル学部教授）
中野聡 氏（一橋大学大学院社会学研究科教授・研究科長）

学校訪問（九州大学での講演）「アジアの中のフィリピン：地域紛争と歴史」

◆日　時：平成28年7月22日(金) 14:50～16:20　◆参加者：90人
◆会　場：九州大学箱崎キャンパス 経済学部209教室　◆モデレーター：清水一史 氏（九州大学大学院経済学研究院教授）
◆共　催：九州大学大学院経済学研究院

市民講演会（福岡）「20世紀のフィリピン：帝国の子、友、敵」

◆日　時：平成28年7月23日(土) 13:30～15:30　◆参加者：90人
◆会　場：エルガーラホール7F 中ホール　◆対談者：清水展 氏（京都大学東南アジア研究所教授）
◆協　力：福岡・フィリピン友好協会

『Philippines - Japan Friendship:Thoughts on 60 Years and Beyond An Anniversary Symposium』

日本・フィリピン国交正常化60周年を記念し、マニラでもシンポジウムが開催されました。

◆日　時：平成28年11月25日(金) 13:00～17:00
◆会　場：アテネオ・デ・マニラ大学
Ricardo Leong Hall Auditorium（フィリピン）
◆講　演：レイナルド・C・イレート 氏（2003年受賞者）
アンベス・R・オカンポ 氏（2016年受賞者）
永野善子 氏（神奈川大学人間科学部教授）
キドラット・タヒミック 氏（2012年受賞者）
◆モデレーター：ウィルフリド V. ヴィラコルタ 氏
（デ・ラ・サール大学名誉教授）
◆協　力：アテネオ・デ・マニラ大学
（Japanese Studies Program、Department of History）

マニラ講演会

『アンベス・R・オカンポ　ヤスミーン・ラリ　東京講演会 ―未来に向けた歴史の語り方・伝え方、災害に強い社会づくりを共に考える―』

受賞者の功績と叡智を多くの人と共有するため、福岡での公式行事に続き、オカンポ氏とラリ氏の講演会が東京で行われました。

◆日　時：平成28年9月20日(火)17:00～19:20
◆会　場：国際交流基金 JFICホール（東京都新宿区）
◆参加者：70人
◆モデレーター：寺田勇文 氏（上智大学総合グローバル学部教授）
小西正捷 氏（立教大学名誉教授）

記者会見および広報活動など

受賞者記者会見

9月15日、国内外のメディア参加のもと、受賞者記者会見を開催。冒頭に髙島宗一郎福岡市長が福岡市紹介のプレゼンテーションを行いました。福岡市が世界有数のコンパクトシティであることや、歴史ある伝統文化、豊かな自然、食文化に恵まれた魅力、アジア文化賞をはじめとした市のアジア施策を英語で紹介しました。

その後受賞者の紹介、スピーチが行われ質疑応答へ。賞の意義に関する質問には「自国の先人に続けて大変栄誉である」。賞金の使途については「自国の子どもの教育や後進の人材育成に使いたい」と答えました。留学生の取材チーム「HAKATAKKO　PRESS」は自国の受賞者に質問し、「賞を励みに前へ進んでいく思い」を受け取りました。福岡女子高校の生徒が「高校生のうちにするべきこと」を尋ねると、「家族を大切にすること」を挙げ、若い頃は何にでもチャレンジするようにアドバイスしました。

【受賞者記者会見】
◆日　時：平成28年9月15日（木）
　　15:20～16:20
◆会　場：グランドハイアット福岡
　　ザ・グランドボールルームA

髙島市長によるプレゼンテーション、福岡市の魅力をPR

海外記者からの質問

質問に答える受賞者

留学生取材チーム「HAKATAKKO PRESS」による質問

福岡女子高校の生徒たちによる質問

様々な広報媒体によるPR

5月末の受賞者発表から9月の公式行事までの間、様々な広報媒体を活用したPR活動を展開。

発表時は受賞者の国で現地大使館・領事館の協力を得て現地メディアに情報を発信、各国の新聞やWEBに「FUKUOKA　PRIZE」が掲載されました。またアジアンパーティの共同プロモーションや文化賞ホームページ、SNS、ポスター、チラシ配布等に加えて、京都・同志社大学で開催された国際的なアジア学会に文化賞の展示ブースを出展しPR活動を展開しました。

アジア学会での展示ブース

海外メディア向けプレスツアー

昨年に引き続き、国際交流基金アジアセンターと共催で海外メディア向けプレスツアーを実施。

受賞者の出身国である、インド、フィリピン、パキスタンをはじめ、アジア各国の記者が福岡を訪れ、福岡アジア文化賞や福岡市の魅力を広く取材、発信しました。

◆取材メディア：6か国10名
- Delhi Times（インド）
- CNN PHILIPPINES、Philippine Daily Inquirer、Filipino-Japanese Journal（フィリピン）
- Jang Group他（パキスタン）
- The New Straits Times（マレーシア）
- The Nation（タイ）
- Vietnam Television（ベトナム）

◆日　時：2016年9月15日（木）～9月16日（金）
◆取材先：授賞式、学校訪問、アジアフォーカス福岡国際映画祭オープニング、福岡アジア美術館ほか

海外報道記事

報道実績

【報道件数】国内：214件　海外：213件　計：427件　（2016年12月現在）

福岡アジア文化賞
歴代受賞者名鑑

FUKUOKA PRIZE　Roll of Honor
1990 - 2015

第1回 1990

創設特別賞

巴　金
BA Jin
（中国／作家）●
『家』、『寒い夜』等、深い人類愛の溢れる作品で世界的に愛読されている現代中国最高の作家。

創設特別賞

黒澤　明
KUROSAWA Akira
（日本／映画監督）●
「羅生門」はじめ数々の名作で日本映画の存在を世界に知らしめた巨匠。国境・世代を超えた映画人に大きな影響を与えた。

創設特別賞

ジョゼフ・ニーダム
Joseph NEEDHAM
（英国／中国科学史研究者）●
中国科学史の世界的権威であり、非ヨーロッパ文明に対する世界の知識人の見方を一変させた。

創設特別賞

ククリット・プラモート
Kukrit PRAMOJ
（タイ／作家・政治家）●
大河小説「王朝年代記」ほか多くの傑作をものした文豪であり、首相も務めたタイ屈指の文人政治家。

創設特別賞

矢野　暢
YANO Toru
（日本／社会科学者）●
日本の東南アジア地域研究の先駆者。国際学術交流にも貢献した。

第2回 1991

大　賞

ラヴィ・シャンカール
Ravi SHANKAR
（インド／音楽家・シタール奏者）●

豊かな感受性と幅広い表現力でビートルズにも影響を与えた伝統弦楽器シタール奏者。

学術研究賞

タウフィック・アブドゥラ
Taufik ABDULLAH
（インドネシア／歴史学者・社会科学者）

東南アジアのイスラム、地方史に関する意欲的な研究で知られる歴史学者、社会科学者。

学術研究賞

中根　千枝
NAKANE Chie
（日本／社会人類学者）

アジア諸地域での豊富な調査に基づく研究により、「タテ社会論」等独特の社会構造論を提唱した社会人類学者。

芸術・文化賞

ドナルド・キーン
Donald KEENE
（米国／日本文学・文化研究者）

大著「日本文学史」はじめ多くの著作を世に送り、研究の礎を築いた、日本文学研究の国際的権威。

●は故人

第3回 1992

大賞
金 元 龍
KIM Won-yong
（韓国／考古学者）●

東アジア全体の視野の中で韓国考古学・美術史学を体系的に位置づけ、その発展に大きく貢献をなした考古学者。

学術研究賞
クリフォード・ギアツ
Clifford GEERTZ
（米国／文化人類学者）●

インドネシアでの調査を通じ、異文化理解のための独自の解釈人類学を築き上げた文化人類学者。

学術研究賞
竹内 實
TAKEUCHI Minoru
（日本／中国研究者）●

社会科学・文学・思想・歴史に亘る総合的な現代中国論を構築した、日本の中国研究の第一人者。

芸術・文化賞
レアンドロ・V・ロクシン
Leandro V. LOCSIN
（フィリピン／建築家）●

東南アジアの風土性とフィリピンの伝統様式の中に現代建築を定着させた建築家。

第4回 1993

大賞
費 孝 通
FEI Xiaotong
（中国／社会学・人類学者）●

中国の伝統文化に基づいた視点からの独自の方法論により、中国社会を多面的に分析した社会学・人類学者。

学術研究賞
ウンク・A・アジズ
Ungku A. AZIZ
（マレーシア／経済学者）

マレーシアの実証的研究に優れた業績をあげた経済学者。

学術研究賞
川喜田 二郎
KAWAKITA Jiro
（日本／民族地理学者）●

ネパールとヒマラヤ地域の人間の生態を体系的に捉え、KJ法など独自の方法論を創出した民族地理学の第一人者。

芸術・文化賞
ナムジリン・ノロゥバンザト
NAMJILYN Norovbanzad
（モンゴル／声楽家）●

モンゴルの伝統的な民謡オルティン・ドーで豊かな表現力を持つ、傑出した声楽家。

第5回 1994

大賞
スパトラディット・ディッサクン
M. C. Subhadradis DISKUL
（タイ／考古学・美術史学者）●

タイ美術・考古学・歴史の世界的権威。東南アジア伝統文化の復興と世界史的位置づけに果たした功績は偉大。

学術研究賞
王 賡 武
WANG Gungwu
（オーストラリア／歴史学者）

華人のアイデンティティ論などユニークな研究でアジア研究をリードする歴史学者。

学術研究賞
石井 米雄
ISHII Yoneo
（日本／東南アジア研究者）●

タイを中心として歴史、宗教、社会を学際的に研究し、地域研究の発展に貢献した東南アジア研究者。

芸術・文化賞
パドマー・スブラマニヤム
Padma SUBRAHMANYAM
（インド／舞踊家）

インド古典舞踊バーラタ・ナーティヤムの第一人者。実践、創作に加えて舞踊学校の設立など教育面にも貢献。

第6回 1995

大賞
クンチャラニングラット
KOENTJARANINGRAT
（インドネシア／文化人類学者）●

インドネシアにおける文化人類学の確立と発展に貢献した文化人類学者。

学術研究賞
韓 基 彦
HAHN Ki-un
（韓国／教育学者）●

独創的な基礎主義の理論を提唱し、教育理論体系を築き上げた教育史・教育哲学の研究者。

学術研究賞
辛島 昇
KARASHIMA Noboru
（日本／歴史学者）●

刻文資料に通暁し、中世南インドの歴史像を書き換えた、アジア史研究の世界的権威。

芸術・文化賞
ナム・ジュン・パイク
Nam June PAIK
（米国／ビデオ・アーティスト）●

テクノロジーと美術を調和させた新しい領域の芸術を開拓した、ビデオ・アートの世界的第一人者。

第7回 1996

大賞
王 仲 殊
WANG Zhongshu
（中国／考古学者）●

古代日中交流史の研究に顕著な業績をあげるとともに、中国における考古学の発展の礎を築いた考古学者。

学術研究賞
ファン・フイ・レ
PHAN Huy Le
（ベトナム／歴史学者）

イデオロギーにとらわれない研究姿勢を貫き、ベトナム農村社会史研究に新知見をもたらした歴史学者。

学術研究賞
衞藤 瀋吉
ETO Shinkichi
（日本／国際関係研究者）●

中国政治・外交史および国際関係論の分野における日本の第一人者であり、日本外交への提言も数多い。

芸術・文化賞
ヌスラット・ファテ・アリー・ハーン
Nusrat Fateh Ali KHAN
（パキスタン／カッワーリー歌手）●

イスラーム宗教歌謡カッワーリーにおいて並ぶ者のいない、パキスタンの国民的歌手。

第8回 1997

大賞
チェン・ポン
CHHENG Phon
（カンボジア／劇作家・芸術家）

内戦で荒廃したカンボジアにおいて、伝統文化保存の枠組みを構築し、民族精神の回復を訴えた劇作家。

学術研究賞
ロミラ・ターパル
Romila THAPAR
（インド／歴史学者）

独立以後のインド史研究を人類史の中に位置づけて実証的に提示し、従来の歴史叙述を一変させた女性歴史学者。

学術研究賞
樋口 隆康
HIGUCHI Takayasu
（日本／考古学者）●

フィールドワークを重視し、シルクロード・中国・古代日中交流史考古学的研究の発展に大きく貢献した考古学者。

芸術・文化賞
林 権 澤
IM Kwon-taek
（韓国／映画監督）

韓国の苦難の近現代史を人々の生き方を通して美しく描き出したアジア映画界の巨匠。

●は故人

第9回 1998

大賞
李 基 文
LEE Ki-Moon
（韓国／言語学者）

韓国語と日本語、アルタイ諸語の比較研究を行い、新しい視点を導入した韓国語研究の国際的権威。

学術研究賞
スタンレー・J・タンバイア
Stanley J. TAMBIAH
（米国／人類学者）●

タイ・スリランカを中心として実証的な研究を行い、オリジナルな解釈を提示した人類学者。

学術研究賞
上田 正昭
UEDA Masaaki
（日本／歴史学者）●

日本における古代国家形成過程を、東アジアの視点から解明した歴史学者。

芸術・文化賞
R．M．スダルソノ
R. M. Soedarsono
（インドネシア／舞踊家・舞踊研究者）

芸術学・歴史学・文学などを幅広く研究する一方、舞踊創作・教育にも多大な業績を上げたインドネシアの代表的舞踊家。

第10回 1999

大賞
侯 孝 賢
HOU Hsiao Hsien
（台湾／映画監督）

厳しい現実を見つめる眼差しと、台湾の風土と人間への愛を以て「悲情城市」などの名作を生んだ世界的な映画監督。

学術研究賞
大林 太良
OBAYASHI Taryo
（日本／民族学者）●

日本民族の文化形成の過程を、アジア諸地域の文化との比較検討において解明した民族学研究の泰斗。

学術研究賞
ニティ・イヨウシーウォン
Nidhi EOSEEWONG
（タイ／歴史学者）

斬新な発想でタイの歴史の大半を書き換えた歴史学者であり、社会的な文章を世に問い続ける文筆家。

芸術・文化賞
タン・ダウ
TANG Da Wu
（シンガポール／ヴィジュアルアーティスト）

独創的な表現活動で、東南アジアにおける現代美術の創造的発展を主導したシンガポールの現代美術家。

第11回 2000

大賞
プラムディヤ・アナンタ・トゥール
Pramoedya Ananta TOER
（インドネシア／作家）●

『人間の大地』はじめインドネシアの民族意識を扱った作品群で民族と人間の問題を一貫して問い続けた作家。

学術研究賞
タン・トゥン
Than Tun
（ミャンマー／歴史学者）●

厳密で実証的な歴史学の方法論によりミャンマー（ビルマ）史を塗り替えた歴史学者。

学術研究賞
ベネディクト・アンダーソン
Benedict ANDERSON
（アイルランド／政治学者）●

世界規模の比較歴史的研究を推進し、『想像の共同体』でナショナリズム研究に新局面を拓いたアイルランドの政治学者。

芸術・文化賞
ハムザ・アワン・アマット
Hamzah Awang Amat
（マレーシア／影絵人形遣い）●

マレーシアを代表する影絵人形芝居ワヤン・クリットのダラン（影絵人形遣い）。

第12回 2001

大賞
ムハマド・ユヌス
Muhammad YUNUS
（バングラデシュ／経済学者）

「グラミン銀行」を創始してマイクロクレジットで開発と貧困根絶に挑戦するバングラデシュの経済学者。2006年ノーベル平和賞受賞。

学術研究賞
速水 佑次郎
HAYAMI Yujiro
（日本／経済学者）●

市場と国家の関係に共同体の視点を盛り込んだ「速水開発経済学」とも称される学問体系を構築した。

芸術・文化賞
タワン・ダッチャニー
Thawan DUCHANEE
（タイ／画家）●

タイの画家。現代人に潜む狂気や退廃、暴力、エロス、死などを独特の画風で表現し、世界に衝撃を与えた。

芸術・文化賞
マリルー・ディアス=アバヤ
Marilou DIAZ-ABAYA
（フィリピン／映画監督）●

民衆の喜びや悲しみを描き出した作品を通してアジアの心を世界に伝える、フィリピンを代表する映画作家。

第13回 2002

大賞
張 芸 謀
ZHANG Yimou
（中国／映画監督）

現代中国の苦難に満ちた歩みを、一貫して農民・民衆の立場から描いてきた映画界の巨匠。

学術研究賞
キングスレー・M・デ・シルワ
Kingsley M. DE SILVA
（スリランカ／歴史学者）

スリランカにおける植民地時代の実証研究を通じて歴史学研究に多大な貢献をした歴史学者。

学術研究賞
アンソニー・リード
Anthony REID
（オーストラリア／歴史学者）

『大航海時代の東南アジア』などで、民衆の生活史の視点から東南アジア史に新境地を拓いたオーストラリアの歴史学者。

芸術・文化賞
ラット
Lat
（マレーシア／マンガ家）

マレーシアの大衆の生活を基底に、社会の矛盾を鋭利な諷刺の目で切り取って表現したマンガ家。

第14回 2003

大賞
外間 守善
HOKAMA Shuzen
（日本／沖縄学者）●

「沖縄学」を大成し、伝統的な言語・文学・文化の分野を中心に常に沖縄研究をリードしてきた研究者。

学術研究賞
レイナルド・C・イレート
Reynaldo C. ILETO
（フィリピン／歴史学者）

東南アジアで最初の反植民地・独立闘争であるフィリピン革命の先導的研究者。

芸術・文化賞
徐 冰
XU Bing
（中国／アーティスト）

独創的な「偽漢字」や「新英文書法」の創造を通じて東洋と西洋の文化の融合を試み、アジア現代美術の評価を高めたアーティスト。

芸術・文化賞
ディック・リー
Dick LEE
（シンガポール／シンガーソングライター）

シンガポールの多文化社会に生まれ、アイデンティティを追求する中で独特な音楽を開花させた、アジア・ポピュラー音楽の旗手。

●は故人

第15回 2004

大賞
アムジャッド・アリ・カーン
Amjad Ali KHAN
（インド／サロード奏者）

インド古典弦楽器「サロード」演奏の巨匠。「音楽はあらゆるものを超える」という信念のもと、アジア音楽の精神を広く伝えた。

学術研究賞
厲　以　寧
LI Yining
（中国／経済学者）

中国の経済改革の必要性をいち早く理論的に提起し、改革の実現への道程を準備した経済学者。

学術研究賞
ラーム・ダヤル・ラケーシュ
Ram Dayal RAKESH
（ネパール／民俗文化研究者）

ネパール女性に関する諸問題にも取り組む、ネパールの民俗文化研究の第一人者。

芸術・文化賞
ローランド・シルワ
Roland SILVA
（スリランカ／文化遺産保存建築家）

イコモス（国際記念物遺跡会議）委員長を務めアジア遺産の評価と保存に大きく貢献したスリランカの遺跡保存の専門家。

第16回 2005

大賞
任　東　権
IM Dong-kwon
（韓国／民俗学者）●

韓国民俗学の開拓者であり、日韓中の学術交流にも大きく貢献した東アジア民俗学界の第一人者。

学術研究賞
トー・カウン
Thaw Kaung
（ミャンマー／図書館学者）

貴重な貝葉写本の保存と活用に多大な業績をあげた、図書館学者であり、古文献保存学の泰斗。

芸術・文化賞
ドアンドゥアン・ブンニャウォン
Douangdeuane BOUNYAVONG
（ラオス／織物研究家）

ラオス伝統織物の研究と啓蒙活動を通じて、ラオスおよびアジアの伝統文化の保存と継承に大きな貢献をしている織物研究家。

芸術・文化賞
タシ・ノルブ
Tashi Norbu
（ブータン／伝統音楽家）

ブータンの民間人としては初めて、音楽を中心に伝統文化の保存と継承に取り組んでいるパイオニア。

第17回 2006

大賞
莫　言
MO Yan
（中国／作家）

現代中国文学を代表する作家。中国の都市と農村の現実を独特のリアリズムと幻想的な方法によって描いた、世界文学の旗手。2012年ノーベル賞受賞。

学術研究賞
シャグダリン・ビラ
Shagdaryn BIRA
（モンゴル／歴史学者）

世界規模でのモンゴル研究のリーダーであり、歴史・文化・宗教・言語にわたる優れた研究業績を残した歴史学者。

学術研究賞
濱下　武志
HAMASHITA Takeshi
（日本／歴史学者）

アジア域内の交易・移民・送金のネットワークに焦点をあて、斬新な方法で地域の歴史像の構築に先駆的役割を果たした歴史学者。

芸術・文化賞
アクシ・ムフティ
Uxi MUFTI
（パキスタン／民俗文化保存専門家）

「ローク・ヴィルサ」を創設しパキスタン文化の基層を実証的に追求し続ける、民俗文化保存の第一人者。

第18回 2007

大賞
アシシュ・ナンディ
Ashis NANDY
（インド／社会・文明評論家）

臨床心理学と社会学を統合させた独自の方法論によって、鋭い社会・文明評論活動を行う行動的知識人。

学術研究賞
シーサック・ワンリポードム
Srisakra VALLIBHOTAMA
（タイ／人類学・考古学者）

関係諸学を統合しつつ、徹底した現地調査に基づいて、タイの新しい歴史像を再構築した人類学・考古学者。

芸術・文化賞
朱　銘
JU Ming
（台湾／彫刻家）

深い東洋の精神性を示す表現力と常に革新を求める創造へのエネルギーをあわせもつ、彫刻の巨匠。

芸術・文化賞
金　徳　洙
KIM Duk-soo
（韓国／伝統芸能家）

「サムルノリ」を創始し、伝統音楽を継承すると同時に先端的音楽を創造し続ける伝統芸能家。

第19回 2008

大賞
アン・ホイ
Ann HUI
（香港／映画監督）

幅広いジャンルで多くの話題作を発表して香港映画界を牽引する、アジアの女性監督のパイオニア。

学術研究賞
サヴィトリ・グナセーカラ
Savitri GOONESEKERE
（スリランカ／法学者）

南アジアにおける人権やジェンダーに関する研究で優れた業績を挙げ、高等教育の改革にも尽力した法学者。

学術研究賞
シャムスル・アムリ・バハルディーン
Shamsul Amri Baharuddin
（マレーシア／社会人類学者）

民族問題・マレー世界の研究を東南アジアにいて一貫してリードする社会人類学者。

芸術・文化賞
フォリダ・パルビーン
Farida Parveen
（バングラデシュ／音楽家）

バングラデシュの伝統的な宗教歌謡バウル・ソングの芸術的評価を高め、国際的な普及に貢献した国民的歌手。

第20回 2009

大賞
オギュスタン・ベルク
Augustin BERQUE
（フランス／文化地理学者）

欧日の人間社会と空間・景観・自然に対しての哲学的思索を重ね、独自の風土学を構築し、日本文化を実証的に捉えて、日本理解に大きく貢献した文化地理学者。

学術研究賞
パルタ・チャタジー
Partha CHATTERJEE
（インド／政治学・歴史学者）

正統な歴史から振り落とされてきた「声なき人々」の存在を明らかにし、アジアや途上国の視点から先鋭な問題提起を行ってきた政治学者・歴史学者。

芸術・文化賞
三木　稔
MIKI Minoru
（日本／作曲家）●

邦楽の現代化と国際化をリードし、日本とアジア、また東洋と西洋の音楽の交流と創造に大きな貢献をなした作曲家。

芸術・文化賞
蔡　國強
CAI Guo-Qiang
（中国／現代美術家）

北京五輪での花火の演出を手がけるなど、火薬や花火を用いた独創的手法と、中国伝統の世界観に根ざした表現で、芸術表現の新たな可能性を拓いた現代美術家。

●は故人

第21回 2010

大賞
黄　秉　冀
HWANG Byung-ki
（韓国／音楽家）

韓国の伝統的楽器「伽倻琴（カヤグム）」の伝統を継承し、また新たな音楽独創を融合した演奏家であり作曲家。

学術研究賞
ジェームズ・C・スコット
James C. SCOTT
（米国／政治学者・人類学者）

東南アジアから始まり近現代世界における国家の支配とそれに反発し、抵抗する人々の関係を明らかにした政治学者であり人類学者。

学術研究賞
毛里　和子
MORI Kazuko
（日本／現代中国研究者）

アジア地域研究の共通基盤となる方法的枠組みの構築に大きく貢献した、政治学者であり、日本における現代中国研究の第一人者。

芸術・文化賞
オン・ケンセン
ONG Keng Sen
（シンガポール／舞台芸術家）

現代的な感覚でアジアと欧米の伝統を鮮やかに出合わせる演出作品は、舞台芸術の国際的フロンティアを切り拓く。世界的に活躍する舞台芸術の旗手。

第22回 2011

大賞
アン・チュリアン
ANG Choulean
（カンボジア／民族学者・クメール研究者）

「カンボジア人によるカンボジア研究」の立場から、長い歴史に立脚した生活文化要素を自らの民族感性で解明。さらにアンコール遺跡群の救済事業における国際的枠組みをつくったカンボジアを代表する民族学者。

学術研究賞
趙　東　一
CHO Dong-il
（韓国／文学者）

主著『韓国文学通史』全６巻は、韓国文学研究史上の金字塔と評され、研究領域は儒教・漢字文化圏全域に及ぶ。韓国、日本、中国、ベトナムの比較文学・比較文明の研究者。

芸術・文化賞
ニールズ・グッチョウ
Niels GUTSCHOW
（ドイツ／建築史家・修復建築家）

南アジアを中心とした歴史的建築や都市への洞察を深め、建造物と都市の保存と修復を学際的研究から高次の哲学的営為として昇華させ先導してきた建築史家・修復建築家。

第23回 2012

大賞
ヴァンダナ・シヴァ
Vandana SHIVA
（インド／環境哲学者）

開発やグローバリゼーションのもたらす矛盾を鋭く指摘し続け、自然を慈しみ、生命の尊厳を守る斬新な思想を語り、多くの民衆を導いてきた環境哲学者。

学術研究賞
チャーンウィット・カセートシリ
Charnvit KASETSIRI
（タイ／歴史学者）

アユタヤ史の研究において傑出した業績をあげたほか、タイ近現代史の研究成果を教育に取り入れ、活発な啓蒙活動を行う東南アジアを代表する歴史学者。

芸術・文化賞
キドラット・タヒミック
Kidlat Tahimik
（フィリピン／映画作家・アーティスト・文化観察者）

途上国フィリピンに生きる者の矜持と文化帝国主義批判を独特のユーモアに包んで描く作品群を発表してきた、アジアの個人映画作家の先駆的存在。

芸術・文化賞
クス・ムルティア・パク・ブウォノ
G.R.Ay. Koes Murtiyah Paku Buwono
（インドネシア／宮廷舞踊家）

幼少よりジャワ文化を深く学び、300年に及ぶ伝統的宮廷舞踊を広く世に紹介するとともに、中部ジャワ伝統文化の保存と発展に尽力してきた、宮廷舞踊の継承者。

第24回 2013

大賞
中村　哲
NAKAMURA Tetsu
（日本／医師）

パキスタンとアフガニスタンで、30年にわたり患者、貧者、弱者のための医療や開拓・民生支援の活動を続け、異文化の理解と尊重を求める国際協力を実践。

学術研究賞
テッサ・モーリス＝スズキ
Tessa MORRIS-SUZUKI
（オーストラリア／アジア地域研究者）

民族や国家の境界を越え、新しい地域協力や市民社会の在り方を社会の端から構想し、アジアの人々の相互理解に多大な貢献を為しているアジア地域研究者。

芸術・文化賞
ナリニ・マラニ
Nalini MALANI
（インド／アーティスト）

映像や絵画を組み合わせた大がかりな空間造形を通して、宗教対立や戦争、女性への抑圧、環境破壊など、世界が直面する今日的かつ普遍的なテーマに挑み続ける美術家。

芸術・文化賞
アピチャッポン・ウィーラセタクン
Apichatpong WEERASETHAKUL
（タイ／映画作家、アーティスト）

民話や伝説の中に個人の記憶や前世のエピソード、時事問題に対する言及などを挿入する斬新な映像話法で世界の映画界に大きな旋風を巻き起こしている気鋭の映画作家。

第25回 2014

大賞
エズラ・F・ヴォーゲル
Ezra F. VOGEL
（米国／社会学者）

戦後アジアの政治経済社会の変動や、アジアの新工業経済地域（NIEs）の先駆的な研究に業績をもち、国際関係に関する冷静で重みのある提言を行う東アジア研究の権威。

学術研究賞
アジュマルディ・アズラ
Azyumardi AZRA
（インドネシア／歴史学者）

イスラームの宗教・文化の深い理解に基づき、多元的で調和ある市民社会の形成に尽力し、異文化間の相互理解に貢献するパブリック・インテレクチャル。

芸術・文化賞
ダニー・ユン
Danny YUNG
（香港／文化クリエイター）

多数の斬新な舞台作品を発表する一方、文化政策や芸術教育にも取り組み、アジアと世界、伝統と現代を繋ぐ多彩な活動でアジアの芸術文化を牽引する文化クリエイター。

第26回 2015

大賞
タン・ミン・ウー
Thant Myint-U
（ミャンマー／歴史学者）

グローバルな視点からミャンマーの歩みを綴る傑出した歴史家であるとともに、歴史的建造物の保存や持続可能な都市計画に取り組み、自国の平和創造をめざす知的指導者。

学術研究賞
ラーマチャンドラ・グハ
Ramachandra GUHA
（インド／歴史学者・社会学者）

民衆の側に立った「環境史」の地平を切り開き、また、多様性を抱える大国インドの複雑な歴史を丁寧に辿り民主主義の実像を描いた著書でも知られる、インドを代表する歴史家。

芸術・文化賞
ミン・ハン
Minh Hanh
（ベトナム／ファッションデザイナー）

ベトナム固有の少数民族の刺繍や織物を融合させた現代的なデザインを創造し、若手育成や市場開拓に取り組みながら、ファッション文化の発展に貢献するデザイナー。

●は故人